

臨地実習終了後の学生の看護観

藤田和加子・石井あゆみ・徳珍温子・本村香

大阪信愛女学院短期大学

Human and Environment Vol. 12 (2019)

Students' Views on Nursing after Completing On-Site Practical Training Program

Wakako Fujita, Ayumi Ishii, Atsuko Tokuchin and Kaori Motomura

Osaka Shin-Ai College, Japan

The purpose of this study is to reveal how nursing students' views on nursing have been formed after their completing an on-site practical training program. In the on-site practical training program, nursing students are expected to have clinical experiences through their responsible patients, the patients' family members and faculties and then to gradually embody abstract things while thinking through what nursing is. Their views on nursing are all about how they look at and how they think about nursing, becoming the bases on which they make decisions and proactively take actions as nurses. 47 third-year students of A Junior College who had completed their on-site practical training program were requested to freely describe about "My Views on Nursing" anonymously. The text-mining approach was taken for the analysis of these free descriptions with the use of a free software program named KH-Coder and then a hierarchical cluster analysis was performed. Consequently, based on the idea that five clusters were appropriate, the free descriptions were categorized into the followings: 【Exposed to Consideration for Family Members】 , 【Providing Nursing Service with Moral Values】 , 【Protecting Living and Health of Patients】 , 【Extracting Potential of Patients According to Their Environment】 , and 【Thinking About Safety and Comfort From Perspective of Patients】 . After completing their on-site practical training program, the nursing students of A Junior College formed their views on nursing such as respecting the dignity of patients and the considerations of their family members and thinking about the safety and comfort from the perspective of patients.

Keywords: Nursing student・Views on nursing・On-site practical training

1. 緒言

看護観は、看護学生の大半が入学前に「なぜ看護師になろうと思ったのか？」という動機が問われる所から始まり、在学中には看護過程を通して看護の基盤となる知識や技術を習得しつつ日々の生活においても多様な経験をしながら「どのような看護師になりたいのか？」ということの中で問い続ける中で形成されていく。井上ら[1]は「看護観とは看護に対する観念、態度、性格、経歴、教養、体験を通じて出来上がった

*大阪信愛学院短期大学看護学科
〒538-0053 大阪市鶴見区鶴見 6-2-28
TEL: 06-6180-1041
E-mail: w-fujita@osaka-shinai.ac.jp

受付：2019年8月29日 受理：2019年10月3日

©2019 大阪信愛学院短期大学

一人一人に特有な看護の見方」と述べている。また、小田ら[2]は「看護学生は臨地実習に置いて対象者に関わりながら学んでいくと言う教育上の特性があり、臨地実習において対象者に関わりながら何が看護となるのか考え学びを深めていくことは、看護観の基盤を形成するためにも重要である」と述べている。

3年過程のA短期大学看護学科では、1、2年次に基礎看護学実習で約1～2週間、3年次に、母性看護、小児看護、成人看護、老年看護、在宅看護、精神看護の領域で、約7ヶ月、臨地実習が行われることになっており、講義・演習で習得した知識・技術・態度を実際の場面を通して看護に統合していく位置づけとなっている。臨地実習では、受け持ち患者や家族、看護師、教員を通じて臨床経験をいき、看護とは何かを考え、抽象的なものから少しずつ具現化していく。実習の学びは看護学生の看護観形成に大きく影響し、学生時代に培った看護観は、卒業後の看護、また学習意欲や自信に繋がり、そのため教員の関わりも重要である。すなわち看護観は、看護に対する看護師自身の見方、考え方であり、看護師としての意志を決定し主体的に行動するための基盤となる。

そこで、3年間の臨地実習を終え、学生がどのような看護への考え方が形成されているかを、明らかにすることを目的に、文章化された看護観の記述からテキストマイニングを用いて分析した。

2. 研究方法

研究対象：A短期大学の臨地実習が全て終了した同意が得られた看護学生 3回生 47名。

研究期間：平成28年12月～平成29年3月

調査内容：研究の依頼に対して承諾が得られた後、対象者に「私の看護観」について、自由記述で回答するように求めた。

分析方法：自由回答文の解析には、フリーソフトウェア KH-Coder (khc.sourceforge.net) を用いてテキストマイニングを行った。テキストマイニングは、大量のテキストデータ（文字データ）から、有用な情報（キーワード）を取り出し、クラスター分析などの多変量解析が可能であることから、学生の看護観形成に及ぼした要因を客観的に解明できる。看護学生の看護観の分析に直接関係のない助詞や句読点を除去し、テキストデータと単語頻出語の分析結果から、同じ意味で用いられる語がないかを検索し、意味が共通する単語に置き換え、データクリーニングをした。頻出語の出現パターンの似通った語の組み合わせを検討するために、出現回数10回以上のもののうち、名詞、サ変名詞、形容動詞、ナイ形容、副詞可能、タグ、名詞C、を用いて Ward 法による階層的クラスター分析を行った。

用語の操作的定義：本研究で使用する用語を下記のように定義する。「看護観」とは調査時現在までに学生が培った看護についての見方・考え方とする。

倫理的配慮：対象者に対して、研究の目的、意義、方法、研究への参加は自由意思であること、同意しない場合や研究途中での中断をしても不利益を被らないこと、また調査で得られたデータは個人が特定とされないよう無記名とし、匿名性・プライバシーの保護の厳守、研究及び学会発表後は、全てのデータを破棄することを文章と口頭で説明した。本研究では、対象者と研究者が学生と教員という関係にあり、研究協力の強制力が働くことも考えられるため、研究の協力は強制ではないこと、今後の学業成績には一切関係ない事を強調して説明した。調査用紙の回収については回収箱を設置し、提出をもって研究協力への同意とした。本研究は、所属施設の大阪信愛学院短期大学、研究倫理審査委員会の承認を得て行った。

3. 結果

3.1. 単語頻度分析

総抽出語数は6950語であり、使用語数は2789語であった。上位100位の頻出語を表1に表す。上位10位以内の頻出語は【看護】を筆頭に【患者】【人】【考える】【行う】【ケア】【倫理】【必要】【思う】【大切】であった。原文を参照すると、最も多かった【看護】では、「その人が持っている力を最大限に発揮し、よりよく生きることができるよう支援していくことが看護だと思う」「看護とは、患者の意見を尊重し寄り添うことである」「一人一人の患者さんに合った看護を提供する必要がある」などがあり、【患者】では「患者さんを第一に考える」「患者さんのニーズに応える」「患者の尊厳を守る」などがあり、「人」では「人は平等に看護を受けるに値する」「全ての人に愛を持って接する」「人は心身共に生涯を持っていても、その人らしく生きていくことが保障される」などと記述されていた。

3.2. クラスター分析

クラスター分析の結果から5クラスターが妥当だと判断された(表2)。クラスター1は「家族」「思い」を含む【家族に対する思いを知る】、クラスター2は「情報」「大切」「自分」「関係」「ケア」「倫理」「人」「患者」「看護」「尊重」「提供」「必要」を含む【倫理観を持って看護を提供する】、クラスター3は「存在」「対象」「知識」「尊厳」「生活」「行動」「状態」「健康」を含む【患者の生活と健康を守る】、クラスター4は「力」「コミュニケーション」「環境」を含む【環境に合わせて患者の力を引き出す】、クラスター5は「安全」「安楽」「気持ち」「実習」を含む【患者の気持ちになって安全・安楽を考える】とした。

表1. 頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
看護	164	思い	11	判断	8	違う	5
患者	140	状態	11	技術	7	過ごせる	5
人	109	コミュニケーション	10	共有	7	求める	5
考える	73	家族	10	高い	7	見る	5
行う	64	環境	10	支援	7	死	5
ケア	55	関わる	10	社会	7	自然	5
倫理	38	行動	10	病院	7	笑顔	5
必要	37	守る	10	病気	7	常に	5
思う	27	生きる	10	病棟	7	全員	5
大切	26	尊厳	10	平等	7	退院	5
自分	25	知識	10	ニーズ	6	築く	5
提供	20	力	10	管理	6	発達	5
情報	19	寄り添う	9	関わり	6	目	5
健康	18	精神	9	希望	6	役割	5
持つ	18	感じる	8	権利	6	与える	5
安全	17	支える	8	個人	6	医療	4
学ぶ	15	治療	8	今回	6	影響	4
実習	15	受ける	8	質	6	応える	4
尊重	15	重要	8	実践	6	義務	4
生活	14	信頼	8	出来る	6	苦痛	4
対象	14	心	8	様々	6	今	4
安楽	13	身体	8	良い	6	人々	4
存在	13	知る	8	チーム	5	人生	4
関係	12	入院	8	ナース	5	成長	4
気持ち	11	能力	8	維持	5	正しい	4

表2 臨地実習終了後の看護観

クラスター1	クラスター2	クラスター3	クラスター4	クラスター5
家族の思いを知る	倫理観を持って看護を提供する	患者の生活と健康を守る	環境に合わせて患者の力を引き出す	患者の気持ちになって安全安楽を考える
家族 思い	情報 大切 自分 関係 ケア 倫理	人 患者 看護 尊重 提供 必要	存在 生活 対象 知識 尊厳	安全 安楽 気持ち 実習
		行動 状態 健康	力 コミュニケーション 環境	

4. 考察

本研究では、看護学における全ての臨地実習が終了した学生が、看護観形成に影響を及ぼした要因について、計量テキスト分析の1つであるテキストマイニングを用いて検討した。その結果、【家族に対する思いを知る】【倫理観を持って看護を提供する】【患者の生活と健康を守る】【環境に合わせて患者の力を引き出す】【患者の気持ちになって安全・安楽を考える】の5クラスターに分類された。【家族に対する思いを知る】では、看護の対象は患者だけではなく家族も含むということ、【倫理観を持って看護を提供する】では、患者を尊重し、人を大切にするという倫理観が形成されていた。また【患者の生活と健康を守る】【患者の気持ちになって安全・安楽を考える】では、看護師としての使

命感、患者中心の看護、【環境に合わせて患者の力を引き出す】では、個別性を踏まえ安全・安楽に援助する必要性が培われていた。富田ら[3]は、看護観について「学生が学校の授業や実習を通して考えた、看護についての観かた考え方」と述べている。A 短期大学の学生は、長期間にわたる臨地実習での患者や家族、また看護師、教員との関わりを経て、患者の尊厳、家族の思いを尊重すること、患者の立場に立って安全、安楽を重視するという看護観が形成されていると考えられる。また、患者の置かれている環境から、生活と健康を守るといった個別性のある看護の必要性も、学生の看護観に育まれていた。川島[4]は「看護観が明確化することによって、看護や学習に意欲や自信がついていく」と述べている。看護というものを抽象的に捉えるのではなく、学生が臨地実習の経験から感じ表現した

言葉を、看護観として具現化していくことが重要である。看護観を明確化するためには、教員は学生が考え、実践した看護に意味づけをし、臨地実習を通して看護のやりがいを伝えることが、看護観を育むことに繋がると考える。

5. 結論

A 短期大学の臨地実習を全て終えた学生の看護観は、患者の尊厳、家族の思いを尊重し、個別性のある看護を提供することであった。

文献

- [1] 井上百合香他：過去 10 年間の看護観形成に関する研究，第 23 回看護教育 日本看護協会，149-152 (1992)
- [2] 小田亜希子：看護第学生生の看護観に関するテキストマイニングを用いた分析．活水女子大学，活水論文集．看護学部編，3, 3-21 (2015)
- [3] 富田幸江他：基礎看護学実習 I で捉えた看護学生の看護観に関する検討—看護観のレポートからの分析—．山梨県立看護大学短期大学部紀要，9 (1)，61-73 (2003)
- [4] 川島みどり：ともに考える看護論．医学書院，52-53 (1996)

臨地実習終了後の学生の看護観

藤田 和加子

本研究の目的は、看護学生が臨地実習終了後に、どのような看護観が形成されているのかを明らかにすることである。臨地実習では、受け持ち患者や家族、看護師、教員を通じて臨床経験をしていき、看護とは何かを考え、抽象的なものから少しずつ具現化していく。看護観は、看護に対する見方、考え方であり、看護師としての意志を決定し主体的に行動するための基盤となる。

A 短期大学の臨地実習が終了した 3 回生 47 名に対し、「私の看護観」について無記名にて自由記述してもらった。自由回答文の解析にはフリーソフトウェア KH-Coder を用いて、テキストマイニングを行い、その後、階層的クラスタ分析を行った。その結果、5 クラスタが妥当だとされ、【家族に対する思いを知る】【倫理観を持って看護を提供する】【患者の生活と健康を守る】【環境に合わせて患者の力を引き出す】【患者の気持ちになって安全・安楽を考える】に分類した。A 短期大学の学生は、臨地実習終了後、患者の尊厳、家族の思いを尊重すること、患者の立場に立って安全、安楽を考えるという看護観が形成されていた。

キーワード：看護学生・看護観・臨地実習

論文集「人と環境」Vol. 12 (2019)
大阪信愛生命環境総合研究所編